

日本的な配色の考え方

Color combinations thinking in Japanese way

北嶋 秀子 Hideko Kitajima

文星芸術大学大学院芸術研究科美術専攻博士後期課程
Bunsei University of Art

キーワード：色彩調和、陽光的色彩観、月光的色彩観

Keywords: Color harmony, color beauty in the sunlight,
color beauty under the moonlight.

1. はじめに

色彩調和の観点から日本の伝統的な配色美を探ることがこの発表の目的である。日本の伝統的な配色美は大きく 2 つの型に分類されるだろう。1 つは陽光の色彩観であり、もう一つが月光的色彩観である。陽光の色彩観を代表するものが、日光東照宮や暈縞彩色である。月光的色彩観としては、桂離宮や水墨画が考えられる。矢代は「日本の自然ならびにこれを反映したる日本美術の色彩美に、2 つの著しき特色を発見する」と述べ、一方を「多彩」、他方を「渋味」と指摘している¹⁾。陽光の色彩観を「多彩」、月光的色彩観を「渋味」と言い換えることもできるだろう。

2. 自然

自然は、ジャッドやルードを挙げるまでもなく、「自然を色彩調和の真の指標であるとするかなり有力な学派がある」²⁾と言われるくらい配色の模範となるものであった。南北に長く亜寒帯湿潤気候から温帯湿潤気候に属す日本列島は、さまざまな地域性に恵まれ、豊かな国土を有している。自然の変化は、特筆すべき四季の変化を生む。それを木々に見れば、柔らかい新緑、濃い緑、鮮やかな紅葉、樹氷や雪に覆われる白い世界と、四季折々の光景を創り出す。またそれと対応する気象の変化がある。日照は過ぎるでも、足りぬでもなく、地表に降り注ぎ、水蒸気は雨、雲、雪、霧、靄、

霞など多くの現象を生み出す。そして山、川、湖、入り組んだ海岸線など、地勢は変化して、パール・バックの「大地」のような見渡す限り同じ風景が続く均一的な地形は、わが国では見られない。山川草木、そして陽光と変化に富んだ景色であるからこそ美しい、豊かな自然を実感できるのである。そのような恵まれた環境に暮らす日本人の色彩感覚に、周囲の自然が影響を与えるのは当然のことであろう。そこには繊細な色彩感覚が芽生え、育まれてきた。赤と橙や黄を区別するような大味なものではなく、48 色をはるかに越える茶色、また微妙に変化するグレーに 100 色のごときものである。いずれにしても、日本で色彩を語るとき、自然を抜きにして語ることはできない。

3. 陽光的色彩観

長崎盛輝著「色・彩飾の日本史」³⁾では、陽光の色彩観とは多彩で麗らか、明快で対比的であると書かれている。きらびやかな燦爛と当たっている日の光が色彩美を生じる。ここでは、日光東照宮と暈縞彩色で考えてみたい。まず日光東照宮は栃木県西部に位置し、世界文化遺産にも登録されている。その装飾性ゆえに一日中見ても飽きないので、別名「日暮しの門」と言われる陽明門は、陽光の色彩観の最たるものであろう。徳川家康の威光を天下に知らしめるためには、並みの装飾では事足りず、金彩を加えて過剰な上にもさらに過剰を目指したのが東照宮であった。日本を訪れる外国人の大部分が装飾過剰なる日光の建築に驚嘆すると言われる。しかし一方で「芸術たることを欲しながら、ついに芸術に為り得ないような

芸術」をいかもの、キッチュという⁴⁾。そのキッチュにつきまとわれたのが東照宮でもあった。東照宮の建築彩色には、キッチュと誇られる部分があるかもしれない。しかし多彩な鮮やかさは、暈縹彩色とともに日本的配色美を形成する一要素である。

暈縹彩色は、奈良時代に最も栄え、復元された薬師寺金堂の天井に、当時を思わせる鮮やかな彩色を見ることができる。同系統の色を淡色から濃色へと徐々に重ねることによってグラデーションを作り、量さずして量したように見せる彩色技法である。主に青系と赤系、緑系と紫系を組み合わせることによって、鮮明な色彩効果を生み出す。一般的には、同系色のグラデーション 2~4 色を対比的に組み合わせ、1つの植物や紋様を構成している。暈縹彩色の装飾効果がやがて陽光の色彩観を誘導したことは、その鮮やかな立体性を主張する色彩効果で確認することができる。明快で対比的という原理においては、日光以上に明確である。

4. 月光的色彩観

陽光の色彩観を「明」という一字で表すと、「幽」で表されるのが月光的色彩観である。月光の色彩観とは、月の光の下で物を見るような色彩美であり、「侘び」、「さび」、「幽玄」などの日本的な美の系譜と相通じるものである。その代表的な例として、桂離宮と水墨画を考えたい。桂離宮が古くから月の名所として、月見台や月波楼など観月のための施設を備えていること、また欄間や襖の引き手に月の意匠を多用するなど、月との関係が深いことはよく知られている。贅のない構造材が、ただちに化粧材となる日本建築は、もっとも知的にして高度の装飾で、桂離宮の他、伊勢神宮など白

木の神殿にも、その例を見ることができる。しかし、それらは単純さの中に複雑さを隠し、素朴さの中に洗練された人工美を秘めたものであった。庭園における樹木、水、石、建物などは月下においても変りない位相を保ち、季節の移り変わりによって基本的影響を受けない。陽光の色彩観の明快で対比的なるに対し、おぼろにして堅固に安定している。

水墨画は中国から鎌倉時代にわが国に渡来し、室町時代、雪舟によって日本の水墨画の完成を見た。禅宗ないし茶道の枯淡趣味、ならびにその精神主義と強く結びついて展開された。無彩色の墨である点と、にじみによってその輪郭線が不定のため、欧米的観点からの色彩調和論が成立するかどうか議論の分かれるところであるが、月光の色彩観がもつ特徴は、如何なく特性を発揮している。

5. まとめ

2つの色彩観を比較すると、いろいろな軸が見えてくる。武家文化と公家文化、「飾る」文化と「飾らない」文化、縄文的文化と弥生的文化等々である。これらを対にすると表1のようになる。ことばによるこれら系譜を色彩に置き換えると、陽光の色彩、月光の色彩の特性が見えてくる。これらが日本的な配色としてどのように受け止められているのか、分析することが今後の課題である。

参考文献

- 1) 矢代幸雄 日本美術の特質、第2版 岩波書店 1965
- 2) 福田邦夫 色彩調和の成立事情 青娥書房 1985
- 3) 長崎盛輝 色・彩飾の日本史 淡交社 1990
- 4) 高橋英夫 ブルーノ・タウト 筑摩書房 2005

表1 ことばによる日本的な美の系譜

陽光の色彩観		月光的色彩観	
武家文化	豪華絢爛	公家文化	雅、高貴
縄文的文化	動的、装飾性、怪奇、有機的	弥生的文化	静的、機能性、優美、無機的
「飾る」文化	造り物、華やか	「飾らない」文化	風流、穏やか